

丹後半島上世屋大フケ周辺における完新世中期以降の植生変遷と火事の影響

○三好小百合・河野樹一郎・高原 光（京都府大・農）

京都府北部に位置する丹後半島は古代から人間活動が活発な地域であったが、人間活動がいつ、どのように植生に影響を与えてきたかはまだ明らかではない。そこで、本研究では、湿地が点在している丹後半島上世屋大フケ周辺での完新世の植生変遷と火事の歴史を明らかにし、さらに人間活動が植生に影響を与え始めた時期を明確にすることを目的として研究を進めている。

宮津市上世屋大フケ周辺には大規模な地すべり地塊が多く、そこには湧水による低湿地が分布している（植村，1994）。このような湿地群の一つで採取された堆積物試料を用いて花粉分析と炭化片分析、植物珪酸体分析を行った。炭化片分析に関しては大フケ周辺で起こった局地的な火事を調べるために、 $250\mu\text{m}$ 以上の大炭化片を計数した。堆積物の年代を決定するために、火山灰分析と AMS による放射性炭素年代測定も併せて行った。試料は深度 83.5 cm の鬼界アカホヤ（K-Ah）火山灰層を含む深度 0–111 cm を分析した。

これらの分析の結果から、以下のような植生変遷が明らかになった。大フケ周辺の植生は K-Ah 火山灰降灰以前から現在まで基本的にはスギが優勢な森林であった。2700 cal yr BP 頃までは、スギを中心にブナやコナラ亜属などの落葉広葉樹を伴った森林であった。その後も 1000 cal yr BP 頃までスギを中心にコナラ亜属を伴った森林が続くが、この時代の層準では炭化片量の増加が見られることから山火事が多発していたと考えられる。1000 cal yr BP 頃以降はスギ林が優勢ではあるが、アカマツに由来すると考えられるマツ属複維管束亜属やヨモギ属やキク科などの陽性草本花粉が増加する。また 1000 cal yr BP 頃からソバ属（*Fagopyrum*）の花粉が連続して認められた。また、この時代の層準からも炭化片が多く認められた。このことと、ソバ属が日本に自生していない栽培植物であることから、焼き畑によるソバ栽培が行われていた可能性が考えられる。また、この層準より少し新しい時代の層準からイネ（*Oryza Sativa*）の植物珪酸体が認められることから湿地を利用してイネの栽培が行われていたことが示唆される。500 cal yr BP 頃から現在にかけてスギの割合が減少し、マツ属の割合がさらに増加した。

丹後半島全域における植生変遷の特徴として、K-Ah 火山灰降灰以前から現在にかけてスギが優勢な森林で、人間活動の影響が大きくなるにしたがって、スギが減少し、マツ属が増加し、二次林化したことが既往の研究（高原ほか，1999）や本研究によって明らかになってきた。この二次林化の時期については、従来の研究では年代決定が不十分であった。今後、詳細な年代を比較するためには丹後半島の他地点においてもさらに詳細な年代測定を行う予定である。